

源氏物語

空蟬

紫式部

青空文庫

うつせみのわがうすごろも風流男に馴なれてぬるやとあぢきなきころ（晶子）

眠れない源氏は、

「私はこんなにまで人から冷淡にされたことはこれまでにないのだから、今晚はじめて人生は悲しいものだと思えられた。恥ずかしくて生きていられない気がする」

などと言うのを小君こぎみは聞いて涙さえもこぼしていた。非常にかわいく源氏は思った。思いなしか手あたりの小柄なからだ、そう長くは感じなかつたあの人の髪もこれに似ているように思われてなつかしい気がした。この上しいて女を動かそうとすることも見苦しいことに思われたし、また真から恨めしくもなっている心から、それきり言ことつてをすることもやめて、翌朝早く帰って行つたのを、小君は気の毒な物足りないことに思った。女も非常にすまないと思っていたが、それからはもう手紙も来なかつた。お憤わづりになつたのだと思うとともに、このまま自分が忘れられてしまうのは悲しいという気がした。それかといつて無理な道をしいてあの方が通ろうとなさることの続くのはいやである。それを思うとこ

れで結末になつてもよいのであると思つて、理性では是認しながら物思ひをしていた。

源氏は、ひどい人であると思ひながら、このまま成り行きにまかせておくことはできないような焦慮を覚えた。

「あんな無情な恨めしい人はないと私は思つて、忘れようとしても自分の心が自分の思うようにならないから苦しんでいるのだよ。もう一度逢^あえるようないい機会をおまえが作つてくれ」

こんなことを始終小君は言われていた。困りながらこんなことでも自分を源氏が必要な人物にしてくれるのがうれしかった。子供心に機会をねらっていたが、そのうちに紀^き伊守^{いしゅ}が任地へ立^たつたりして、残^まつてゐるのは女の家族だけになつたころのある日、夕方物の見分けの紛^まれやすい時間に、自身の車に源氏を同乗させて家へ来た。なんといつても案内者は子供なのであるからと源氏は不安な気はしたが、慎重になどしてかかれることでもなかった。目だたぬ服装をして紀伊守家の門のしめられないうちにと急いだのである。少年のことであるから家の侍などが追従して出迎えたりはしないのでまずよかった。東側の妻^{つまど}戸の外に源氏を立たせて、小君自身は縁を一回りしてから、南^すの隅^{すみ}の座敷の外から元氣よくたたいて戸を上げさせて中へはいった。女房が、

「そんなにしては人がお座敷を見ます」

と小言こごを言っている。

「どうしたの、こんなに今日は暑いのに早く格子こうしをおろしたの」

「お昼から西の対たい——寝殿しんでんの左右にある対の屋の一つ——のお嬢様が来ていらっしつて碁碁を打っていらっしやるのです」

と女房は言った。

源氏は恋人とその継ま娘むすめが碁盤碁盤を中にして対むかい合っているのをのぞいて見ようと思つて開いた口からはいつて、妻戸みすと御簾みすの間へ立つた。小君の上げさせた格子がまだそのままになつていて、外から夕明かりがさしているから、西向きにずっと向こうの座敷までが見えた。こちらの室の御簾のそばに立てた屏風びょうぶも端のほうが都合よく畳まれているのである。普通ならば目ざわりになるはずの几帳きちょうなども今日の暑さのせいで垂れは上げて棹さおにかけられている。灯ひが人の座に近く置かれていた。中央の室の中柱に寄り添つてすわつたのが恋しい人であろうかと、まずそれに目が行つた。紫の濃い綾あやの単衣襲ひとえがさねの上に何かの上着をかけて、頭の恰好かつこうのほつそりとした小柄な女である。顔などは正面にすわつた人からも全部が見られないように注意をしているふうだった。瘦やせつぼちの手はほんの少

しより袖そでから出ていない。もう一人は顔を東向きにしていたからすっかり見えた。白い薄う衣ものの単衣うすあ襲あに淡藍色うすあの小桂こうちぎらしいものを引きかけて、紅あかい袴はかまの紐ひもの結び目の所までも着物の襟えりがはだけて胸が出ていた。きわめて行儀のよくないふうである。色が白くて、よく肥あえていて頭の形と、髪のかかった額あたまつきが美しい。目つきと口もとに愛あい嬌きやうがあつて派手はでな顔である。髪は多くて、長くはないが、二つに分けて顔から肩へかかったあたりがきれいで、全体が朗らかな美人と見えた。源氏は、だから親が自慢こゝろにしているのだと興味きんみがそそられた。静かな性質を少し添そえてやりたいとちよつとそんな気がした。才走さいそうつたところはあつたらしい。暮くが終おつて駄目だめ石いしを入れる時など、いかにも利巧りこうに見えて、そして蓮葉はすつばに騒さわぐのである。奥おくのほうの人は静かにそれをおさえるようにして、「まあお待ちなさい。そこは両方ともいっしょの数かずでしょう。それからここにもあなたのほうの目めがありますよ」

などと言うが、

「いいえ、今度は負けましたよ。そうそう、この隅すみの所を勘定かんじやうしなくては」

指ゆびを折よつて、十、二十、三十、四十と数かずえるのを見てみると、無数むずだという伊予いよの温泉おんせんの湯ゆ桁げの数かずもこの人にはすぐわかるだろうと思おもわれる。少し下品げひんである。袖そでで十二分じふにぶんに口

のあたりをおほうて隙見男に顔をよく見せないが、その今一人に目をじつとつけていると次第によくわかつてきた。少し腫はれぼつたい目のようで、鼻などもよく筋が通っていると見えぬ。はなやかなところはどこもなく、一つずついえば醜いほうの顔であるが、姿態がいかにもよくて、美しい今一人よりも人の注意を多く引く価値があつた。派手はでな愛嬌いきょうのある顔を性格からあふれる誇りに輝かせて笑うほうの女は、普通の見方をもつてすれば確かに美人である。軽佻けいちようだと思ひながらも若い源氏はそれにも関心が持てた。源氏のこれまで知っていたのは、皆正しく行儀よく、つつましく装つた女性だけであつた。こうしただらしなくしている女の姿を隙見したりしたことははじめての経験であつたから、隙見男のいることを知らない女はかわいそうでも、もう少し立っていたたく思つた時に、小君が縁側へ出て来そうになつたので静かにそこを退のいた。そして妻戸の向かいになつた渡わ殿たどのの入り口のほうに立っていると小君が来た。濟まないような表情をしている。

「平生いない人が来ていまして、姉のそばへ行かれないのです」

「そして今晚のうちに帰すのだろうか。逢えなくてはつまらない」

「そんなことはないでしょう。あの人が行つてしまいましたしたら私がよくいたします」

と言つた。さも成功の自信があるようなことを言う、子供だけれど目はしがよく利きくの

だからよくいくかもしれないと源氏は思っていた。碁の勝負がいよいよ終わったのか、人が分かれ分かれに立って行くような音がした。

「若様はどこにいらつしやいますか。このお格子はしめてしまいますよ」

と言つて格子をことごとと中から鳴らした。

「もう皆寝るのだろう、じゃあはいつて行つて上手にやれ」

と源氏は言った。小君もきまじめな姉の心は動かさそうではないのを知つて相談はせず、そばに人の少ない時に寢室へ源氏を導いて行こうと思つているのである。

「紀伊守の妹もこちらにいるのか。私に隙見すきみさせてくれ」

「そんなこと、格子には几帳きちょうが添えて立ててあるのですから」

と小君が言う。そのとおりだ、しかし、そうだけれど源氏はおかしく思ったが、見たとは知らずまい、かわいそうだと考えて、ただ夜ふけまで待つ苦痛を言っていた。小君は、今度は横の妻戸をあけさせてはいつて行つた。

女房たちは皆寝てしまった。

「この敷居の前で私は寝る。よく風が通るから」

と言つて、小君は板間いたまに上敷うわしきをひろげて寝た。女房たちは東南の隅すみの室に皆はいつて

寝たようである。小君のために妻戸をあけに出て来た童女もそこへはいって寝た。しばらく空寝入りをして見せたあとで、小君はその隅の室からさしている灯の明りのほうを、ひろげた屏風びょうぶで隔ててこちらは暗くなつた妻戸の前の室へ源氏を引き入れた。人目について恥をかきそうな不安を覚えながら、源氏は導かれるままに中央の母屋もやの几帳の垂絹たれをはねて中へはいろいろとした。

それはきわめて細心に行なつてゐることであつたが、家の中が寝静まつた時間には、柔らかな源氏の衣摺きぬずれの音も耳立つた。女は近ごろ源氏の手紙の来なくなつたのを、安心のできることに思おうとするのであつたが、今も夢のようなあの夜の思い出をなつかしがつて、毎夜安眠もできなくなつてゐるころであつた。

人知れぬ恋は昼は終日物思いをして、夜は寝ざめがちな女にこの人をしてゐた。暮の相手の娘は、今夜はこちらで泊まるといつて若々しい屈託のない話をしながら寝てしまった。無邪気に娘はよく睡ねむつていたが、源氏がこの室へ寄つて来て、衣服の持つ薰物たきものの香が流れてきた時に気づいて女は顔を上げた。夏の薄い几帳越しに人のみじろぐのが暗い中にもよく感じられるのであつた。静かに起きて、薄衣うすものの単衣ひとえを一つ着ただけでそつと寝室を抜けて出た。

はいつて来た源氏は、外にだれもいず一人で女が寝ていたのに安心した。帳台から下の所に二人ほど女房が寝ていた。上に被かすいた着物をのけて寄って行った時に、あの時の女よりも大きい気がしてもまだ源氏は恋人だとばかり思っていた。あまりによく眠っていることなどに不審が起こつてきて、やつと源氏にその人でないことがわかった。あきれるとともにくやくしてならぬ心になったが、人違いであるといつてここから出て行くことも怪しがられることで困つたと源氏は思った。その人の隠れた場所へ行つても、これほどに自分から逃げようとするのに一心である人は快く自分に逢あうはずもなく、ただ侮蔑ぶべつされるだけであろうという気がして、これがあの美人であつたら今夜の情人にこれをしておいてもよいという心になった。これでつれない人への源氏の恋も何ほどの深さかと疑われる。

やつと目がさめた女はあさましい成り行きにただ驚いているだけで、真から気の毒なような感情が源氏に起こつてこない。娘であつた割合には蓮はすづば葉な生意気なこの人はあわてもしない。源氏は自身でないようにしてしまいたかつたが、どうしてこんなことがあつたかと、あとで女を考えてみる時に、それは自分のためにはばかつていたのであるから、自分の恋しい冷やかな人が、世間をあんなにはばかつていたのであるから、このことで秘密を暴露させることになつてはかわいそうであると思つた。それでたびたびかたが方違えにこ

の家を選んだのはあなたに接近したためだったと告げた。少し考えてみる人には継母との関係がわかるであろうが、若い娘心はこんな生意気な人ではあってもそれに思い至らなかった。憎くはなくても心の惹かれる点のない気がして、この時でさえ源氏の心は無情な人の恋しさでいっぱいだった。どこの隅にはいつて自分の思い詰め方を笑っているのだろう、こんな真実心というものはさらにあるものでもないのにと、あざける気になってみても真底はやはりその人が恋しくてならないのである。

しかし何の疑いも持たない新しい情人も可憐かれんに思われる点があつて、源氏は言葉上手ことばじょうずにのちのちの約束をしたりしていた。

「公然の関係よりもこうした忍んだ中のほうが恋を深くするものだと言つてます。あなたも私を愛してくださいよ。私は世間への遠慮がないでもないのだから、思ったとおりの行為はできないのです。あなたの側でも父や兄がこの関係に好意を持ってくれそうなことを私は今から心配している。忘れずにまた逢いに来る私を待っていてください」

などと、安っぽい浮気男うわきの口ぶりでものを言っていた。

「人にこの秘密を知らせたくありませんから、私は手紙もようあげません」

女は素直すなおに言っていた。

「皆に怪しがられるようにしてはいけませんが、この家の小さい殿上人てんじょうびとね、あれに託して私も手紙をあげよう。気をつけなくてはいけませんよ、秘密をだれにも知らせないように」

と言いついて、源氏は恋人がさつき脱いで行つたらしい一枚の薄衣うすものを手を持って出た。隣の室に寝ていた小君こぎみを起こすと、源氏のことを気がかりに思いながら寝ていたので、すぐに目をさました。小君が妻戸を静かにあけると、年の寄つた女の声で、

「だれですか」

おおげさに言つた。めんどろうだと思ひながら小君は、

「私だ」

と言ふ。

「こんな夜中にどこへおいでになるんですか」

小賢こさかしい老女がこちらへ歩いて来るふうである。小君は憎らしく思つて、

「ちよつと外へ出るだけだよ」

と言ひながら源氏を戸口から押し出した。夜明けに近い時刻の明るい月光が外にあつて、ふと人影を老女は見た。

「もう一人の方はどなた」

と言った老女が、また、

「民部みんぶさんでしょう。すばらしく背の高い人だね」

と言う。朋輩ほうばいの背高女のことをいうのであろう。老女は小君と民部がいつしよに行くのだと思っていた。

「今にあなたも負けない背丈せたけになりますよ」

と言いながら源氏たちの出た妻戸から老女も外へ出て来た。困りながらも老女を戸口へ押し返すこともできずに、向かい側の渡殿わたどのの入り口に添って立っていると、源氏のそばへ老女が寄つて来た。

「あなた、今夜はお居間に行っていたの。私はお腹なかの具合ぐあいが悪くて部屋へやのほうで休んでいたのですがね。不用心だから来いと言って呼び出されたもんですよ。どうも苦しくて我慢ができませんよ」

こぼして聞かせるのである。

「痛い、ああ痛い。またあとで」

と言つて行つてしまった。やつと源氏はそこを離れることができた。冒険はできないと

源氏は懲りた。

小君を車のあとに乗せて、源氏は二条の院へ帰った。その人に逃げられてしまった今夜の始末を源氏は話して、おまえは子供だ、やはりだめだと言ひ、その姉の態度があくまで恨めしいふうに語った。気の毒で小君は何とも返辞をすることができなかつた。

「姉さんは私をよほどきらっているらしいから、そんなにきらわれる自分がいやになつた。そうじゃないか、せめて話すことぐらいはしてくれてもよきそうじゃないか。私は伊予介よりつまらない男に違ひない」

恨めしい心から、こんなことを言つた。そして持つて来た薄い着物を寢床の中へ入れて寝た。小君をすぐ前に寝させて、恨めしく思うことも、恋しい心持ちも言つていた。

「おまえはかわいいけれど、恨めしい人の弟だから、いつまでも私の心がおまえを愛するかどうか」

まじめそうに源氏がこう言うのを聞いて小君はしおれてゐた。しばらく目を閉じていたが源氏は寝られなかつた。起きるとすぐに硯すずりを取り寄せて手紙らしい手紙でなく無駄むだ書きのようにして書いた。

空蟬うつせみの身をかへてける木このもとになほ人がらのなつかしきかな

この歌を渡された小君は懐ふところの中へよくしまった。あの娘へも何か言つてやらねばと源氏は思つたが、いろいろ考えた末に手紙を書いて小君に託することはやめた。

あの薄衣うすものは小桂こうちぎだつた。なつかしい気のする匂においが深くついてゐるのを源氏は自身のそばから離そうとしなかつた。

小君が姉のところへ行つた。空蟬は待つていたようにきびしい小言こごとを言つた。

「ほんとうに驚かされてしまった。私は隠れてしまつたけれど、だれがどんなことを想像するかもしれないじやないの。あさはかなことばかりするあなたを、あちらではかえつて軽蔑けいべつなさらないかと心配する」

源氏と姉の中に立つて、どちらからも受ける小言の多いことを小君は苦しく思いながらことづかつた歌を出した。さすがに中をあけて空蟬は読んだ。抜け殻がらにして源氏に取られた小桂が、見苦しい着古しになつていなかつたらうかななどと思ひながらもその人の愛が身に沁しんだ。空蟬のしている煩悶はんもんは複雑だつた。

西の対の人も今朝けさは恥はずかしい気持ちで帰つて行つたのである。一人の女房すらも氣の

つかなかつた事件であつたから、ただ一人で物思いをしていた。小君が家の中を往来する影を見ても胸をおどらせることが多いにもかかわらず手紙はもらえなかつた。これを男の冷淡さからとはまだ考えることができないのであるが、蓮葉な心にも愁を覚える日があつたであらう。

冷静を装つていながら空蟬も、源氏の真実が感ぜられるにつけて、娘の時代であつたらとかえらぬ運命が悲しくばかりなつて、源氏から来た歌の紙の端に、

うつせみの羽はに置く露この木隠れて忍び忍びに濡ぬる袖そでかな

こんな歌を書いていた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2003年4月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

空蟬

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>